



比呂飛賀壺八

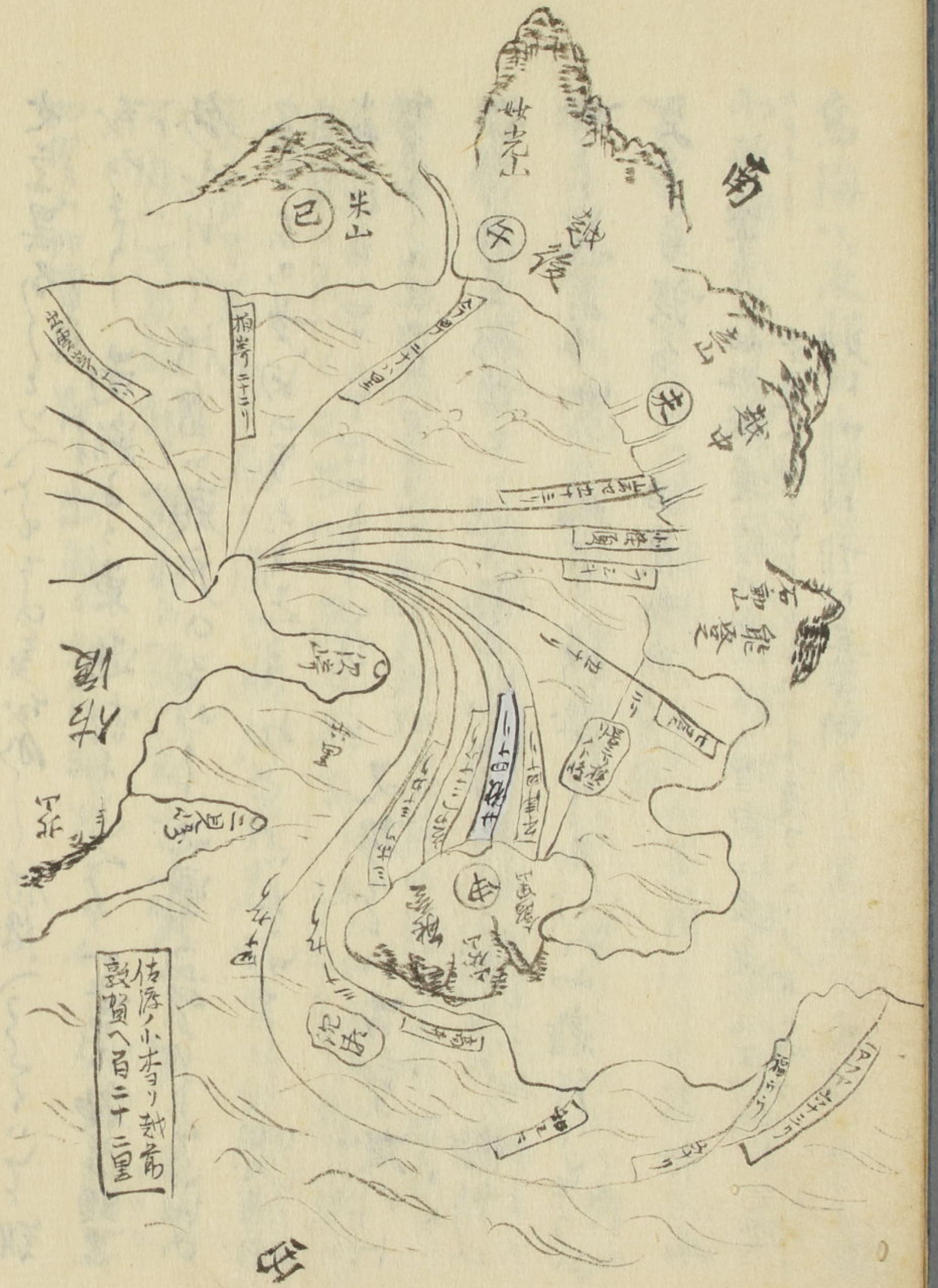
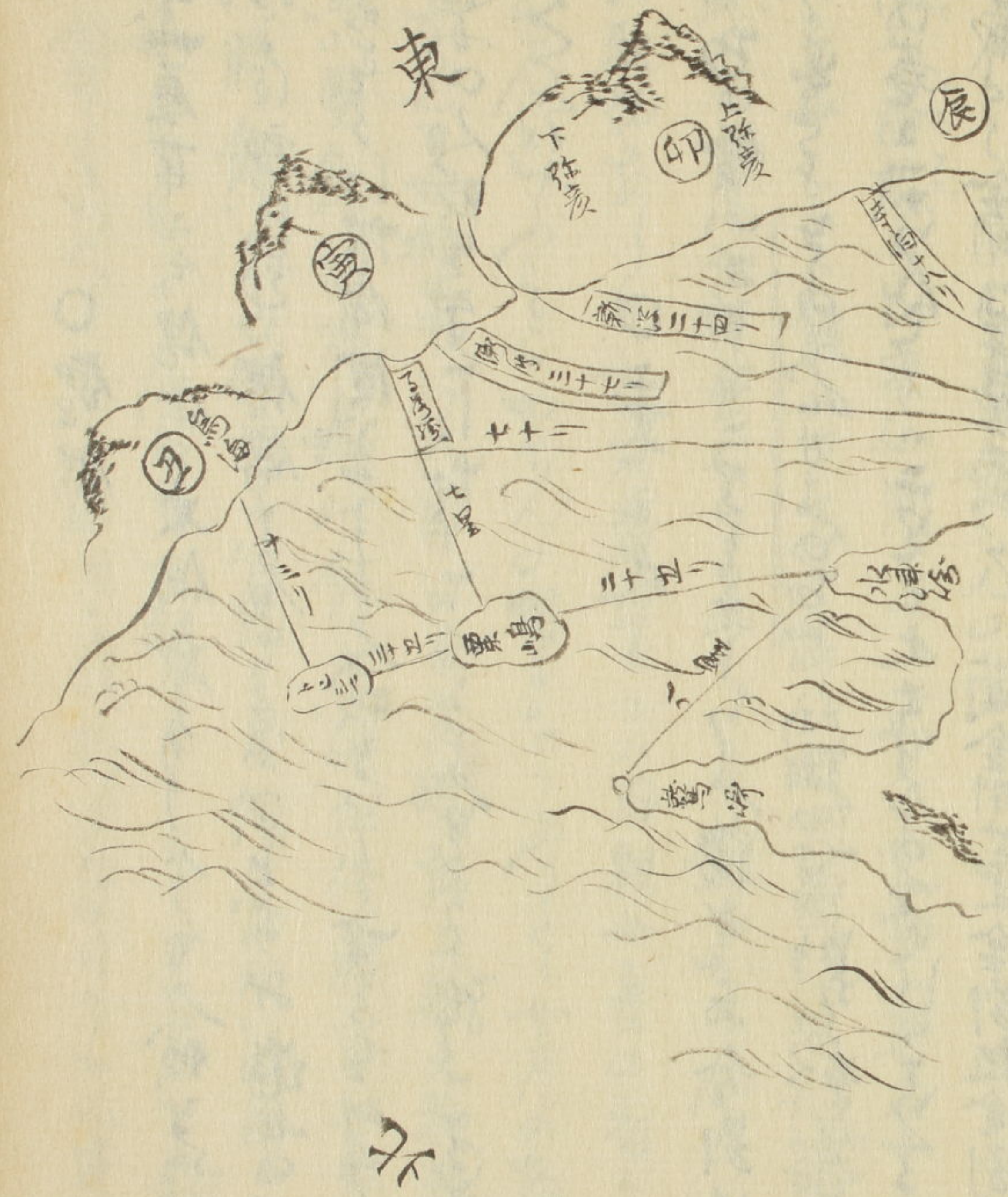
1 曾 5
49
8



鳥海へ水行十三里あり又東申の方岩瀬へ水行十三里
 小瀬瀨へ水行十三里七尾へ水行四十里申の方平津へ水行四十里
 早里立刀へ水行三十八里塩津へ水行三十二里西の方高井へ水
 又佐佐の沢谷より同國二見崎へ水行六里水津橋より
 鷲崎へ水行八里ありありの如く佐佐の港の港の多き由あり
 多邊と名づく又本州雜太郡あり和名鉄田有雜太郡あり
 又其より義多の如く佐と通ぶるれ則和泉の和泉郡あり
 河内へ水行郡あり河内郡あり和泉の和泉郡あり
 和泉の和泉郡あり出ぬふ出ぬ郡あり和泉の和泉郡あり

文字異なることありありの如く佐佐の港の港の多き由あり
 或るは南新より東遊宮あり一書小神字類聚
 録より佐佐の瀬戸の如く又圃あり田の
 多きたは是田の如くことありありの如く
小瀬の佐佐の早里の如くことありありの如く
和泉の如く小本の如くことありありの如く
 又和泉の如く古記に
 佐佐の亦是佐字の一記小油中に記ありありの如く
 佐佐の亦是佐字の一記小油中に記ありありの如く
 佐佐の亦是佐字の一記小油中に記ありありの如く
 佐佐の亦是佐字の一記小油中に記ありありの如く

追考 伊勢國桑名より乾ノ方三里計ニ多度ト云下アリ
 多度大神宮タセタマフ多度コニシドト唱フ
 列トナハトナハト其氏同シ



にんくろのて行宗集れんものいふに
いふありまゝいふに
といふに

○採花令

大内毎年の節をけり候り夜ふ入るを内侍所へ貴
族の多勢群集し候り御豆おしをけり候り
ゆゑ之期其節内侍所へ奉る教録を採花令と
うて採花入候り候り

○号殿

人皇十六代應神天皇は此号殿より号殿^{ウツヤカ}迄
候り候り是より号殿^{ウツヤカ}流あり候り

て号殿といふ

○繪馬

本朝文粹に大にの臣衛山等天神より御幣を授け
のちを授けり候り文の月録より日所幣上紙右幅色
紙の付了之に紙あり候り馬と書て神馬と候り
候り候り候り候り候り候り候り候り候り候り
候り候り候り候り候り候り候り候り候り候り
候り候り候り候り候り候り候り候り候り候り

○嶋臺

是書に候り候り候り候り候り候り候り候り候り
候り候り候り候り候り候り候り候り候り候り
候り候り候り候り候り候り候り候り候り候り

しやちを頭よりまよめるして才がゆへに難からん
料や一もそのゆへに垂増とて古奥に存せらる
り下ふにせむ古奥よりてまよの字を考へ難
あふまをのり續世終たのり
降ふ大臣家のしる人小古進とて廿世世のり
のり通中のまよのりしるのりしるのりしるのり
のりしるのりしるのりしるのりしるのりしるのり
まよのりしるのりしるのりしるのりしるのり
いよりのりしるのりしるのりしるのりしるのり
りやみえりしるのりしるのりしるのりしるのり
るるが古奥のりしるのりしるのりしるのり

やうりしるのりしるのりしるのりしるのり
たれしるのりしるのりしるのりしるのり
ちるのりしるのりしるのりしるのりしるのり
いのりしるのりしるのりしるのりしるのり
虫しるのりしるのりしるのりしるのりしるのり
あふま又面とてしるのりしるのりしるのり

○伊呂波字類巻の叙綴巻の叙字鏡集巻十

綴カ佳反 後使反のりしるのりしるのりしるのり

右の二書よあゆむ語のりしるのりしるのりしるのり
なり玉篇註珠音義韻龜字鏡字彙正字通康熙
字典品字箋和玉篇字彙を授ミナサリしるのりしるのり
字義のりしるのりしるのりしるのりしるのりしるのり
を考へるのりしるのりしるのりしるのりしるのり

結世集結世集の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録

○再び京の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録

○和号分類巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
相玉集巻目録の巻目録
三五事類巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録
の巻目録の巻目録の巻目録

○ 羽衣鳥帽子
月衣鳥帽子

十加屋草やそり五鳥帽子とくぬ鼻のり入る鳥帽子
 ちうのねを股がひきあつたり五の口あつて又鳥帽子
 とつたま鳥帽子の月衣あつてあつてあつてあつてあつて
 小笠帽子あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 小のりあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

○ 天井美塵

同書ふつて天井の正喜式に美塵を別てあつてあつて
 同書ふつて天井の正喜式に美塵を別てあつてあつて

○ 火打袋 浮世袋

國の如き袋をいへる箱の書は有威儀と申てあつてあつてあつて
 女改口 早ふりてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 年夏 早ふりてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 りれば久雷屋の層相同辰方眼の袋也 にはあつてあつてあつて
 ちい色

四角袋月十二三枚ノ
 草中布通三竹刀ノ
 夕ニホク中ラタラセニ
 カタチニ

大十横幅九二寸七分
 世長サ九二寸七分



トモハ紫ノ糸糸也

白草ニテ模様の
 ウルニ草中タル也

草ニテサリ
 高ク九寸
 形ニテ
 圓ノ也

同合夏下札

一 右之京火事傳言云云
但しつらひの傳傳の火事傳
のみを記す事ありしや

下札

伊予國の火事傳言云云
但しつらひの傳傳の火事傳
白川南集言十種の内ありし
見しは記す事ありしや
白川南集言十種の内ありし
見しは記す事ありしや

一 火事の書に有敵伝
思ふに人伝火事傳言云云
新伝あり

一 火事の書に有敵伝
思ふに人伝火事傳言云云
新伝あり

有敵伝のり名目云々
火事傳言云云
火事傳言云云
火事傳言云云
火事傳言云云

本朝武林原始卷之一中

燧袋

古事記曰倭比賣命賜卅那藝斂即農於倭連
命而詔若有急事解茲農口故列尾張國云云
到相武國之時其國造詐白於野中有大沼住是沼
中之神甚道速振神也於是省行其神入坐其野
爾其國造火著其野故知見欺而解其燧倭比
賣命之所給農口而見者火打有其裏於是先以
其御刀折橙卅以其火打而打出火著向火而燒還
還出皆切滅其國等

古事記書云兼文案之今世俗号火打
農有刀者可為此因縁云

又

聖書記曰倭姫命天村雲斂と日本武尊に交りて村

雲敷の錦の借を御所へへこの世をへ腰に錦の赤段を
下へ廻れんころのこころのあはれ

大平丸にきき廻りつ夜も今出仕けられたりつと嬉仕に
ふて坊へ情十文更もつてつ得月へあつらふ又さ敷
たる自太刀柄物に合もすすもつらふ刀に虎のはれ史仕
とつてまのこころ

又浮世仕とていふ

沙金屋のこころ 山幸西武彦明彦のけの刻

度々へへ浮世仕や一年のまろ 栗西

けのこころをへへ浮世仕の勝のこころあはれ

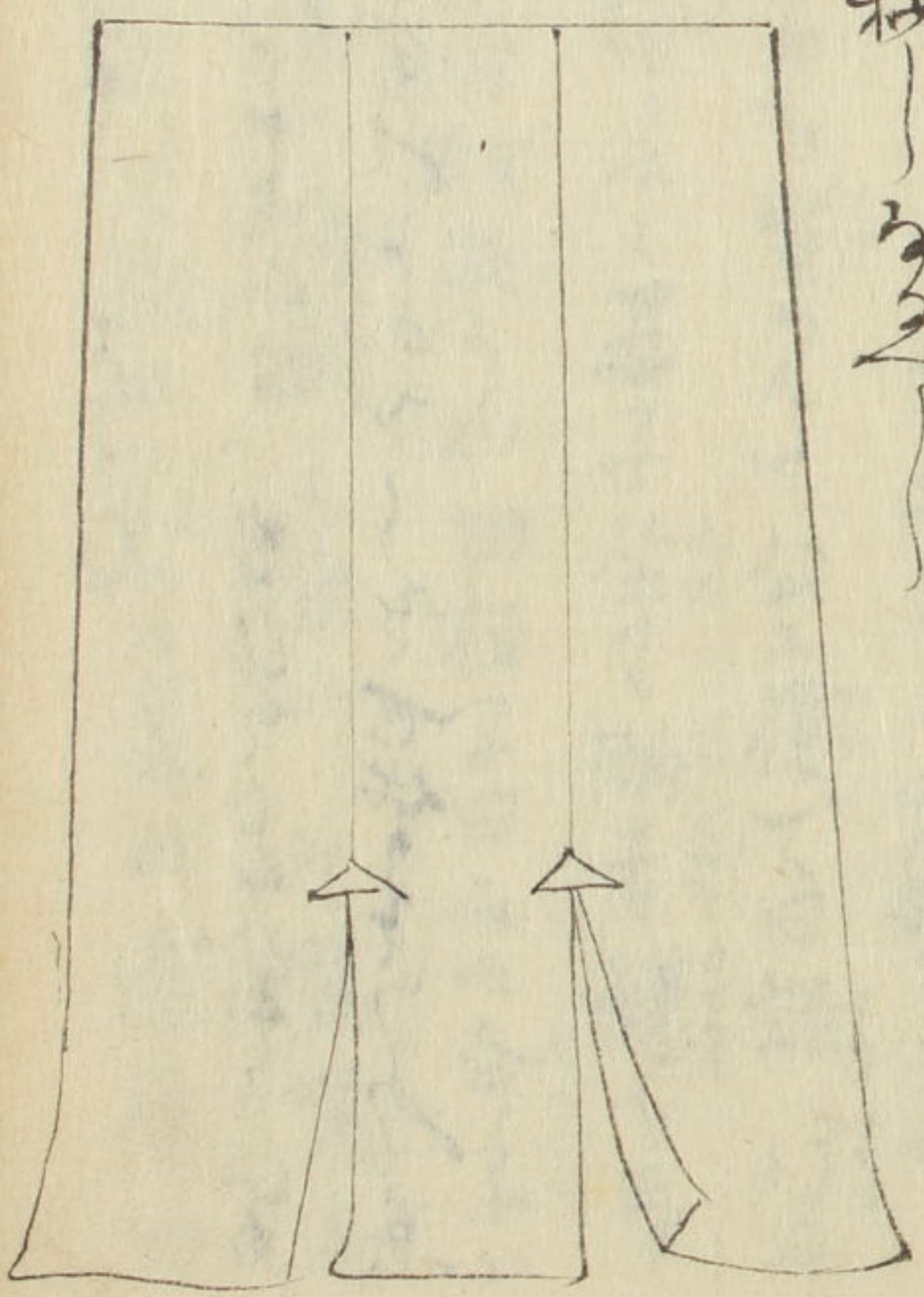
秋翁問語云昔へへ古力につけへへ史仕とていふに後へへ

に紙子に史仕名ありけし説ふれば三角に後へへ史仕あり
しや浮世仕の三角に後へへ史仕の遺刻あり浮世仕に
さるるのつらふあはれあはれあはれ

卯子圓 宝永元年 巻のこに九軒町の無名

系に未れが浮世中品といふ物ありていふは
世仕といふも浮世といふは

○首越女のおれ布の帯に
浮世仕といふは
あはれのこころの縁に
三角の形もあつて
史仕といふは
史仕といふは
史仕といふは
史仕といふは
史仕といふは



しつゝの後のに...
...

○又書女の...
...

○是輕

千加屋...
...

...

○浮願

大女...
大河...
景公...
...

人を博覧強記といふは、其の博覧強記の如く、
の語に本博ありやと博の人の同或ありと、
ふるまふありて年長ゆかりの善子を博覧せしむる
るあり他、其善のありその意を思はざる人の意を
しり罪せしむるの善のあり、
孔子曰可哉古之聽訟者思其意不思其人、
不得所以生乃刑之若必與衆共今之聽訟者不思其
其意而思其人求所以殺是反古之道、
罪を言ふも、
の語にありて、

○第三節

元びきの神の事、
いよの諸説とあけて、
せらるるや西宮澳夷社と大田の所、
鬼吟心而現、
さるるの、
るあり、
て出現、
か、
混同せり、
ふ出現の神、

りし所硫黄の地を去る所の早所ハヤの郡心あり紫岳と號し
御心ミココロの事三所ミヤノの祠あり岩殿と稱す康永らふ祝詞也
しるあり傳平又安公法師が勅あり

又廣修系廣田社二十の祠あり海老主世を稱すともあり
又廣修系四書初合の祠あり日本紀通鑑拾玉集の意慎の
此の勅命のありあり日本紀通鑑拾玉集の意慎の
勅あり

西の海西ノウミの風カゼの吹フクせよ西の宮ありよのまやえい西ノミヤの宮あり
又大己貴子事代主神オホニギハヤヒノミコ遊ユク行ユキ在ア出雲國三穗之崎以
釣魚為樂釣魚又或説又或説云云三十四代

推古天皇九年三月聖德太子始始市賣市賣買術買術誓誓燈見

為高貴鎮護神高貴後世以受比頂高貴宗福神宗福自是始自是始
又西宮に鎮坐のる神神の舊傳舊傳あり之之一一定家卿の
假名遣假名遣ひひの惠比頂惠比頂の字多字多一一倭倭因因人人四夷海邊の
人人を和俗和俗とてとてエビスエビスととししててエビスエビスととふ
るる上上古古のの神神のの名名ありあり以上以上七七福福神神
解解馬馬折折ららるる中中葉葉のの妻妻のの神神のの名名ありあり以上以上七七福福神神
炭火炭火の出出見見るることことのの意意慎慎のの勅勅ありあり以上以上七七福福神神
ととししるることことのの意意慎慎のの勅勅ありあり以上以上七七福福神神
神代卷神代卷にに伊弉伊弉
諾尊伊弉丹尊伊弉諾尊伊弉丹尊已生已生火火八洲國及山川草木八洲國及山川草木於是生於是生
日神日神次次生生月神月神次次生生蛭見蛭見雖雖已三歳已三歳脚脚不不立立故載故載
之天磐櫛樟船之天磐櫛樟船而順風放棄而順風放棄これ日神日神ハ第一第一ににををふふ

まかしくこれ眞の福神とあはれや世に福の福なる可相
 を志すは福とて富の富なる語のふ似たる凡人の生涯
 の福とては身枯得夫の交と脱とを無事なるにこそよむ
 のありてはた今が福とてを捨て捨て我知るもる言
 とはるは是甚しき事ありや 大黒と大田と命とナリハカヨハ
カヨハ 天路と道とあるは所と見ハ拒ハのひハ理の拒ハつて
してたありては 又布仕を和布のあり徳をつて 又富と
を知ハハ 福とて 又富と
 えびとての神位を尊とての福とてを尊とての福とて
 毎日氣を信ふるは富なるを尊とての福とてを尊とて

まかしくこれ眞の福神とあはれや世に福の福なる可相
 を志すは福とて富の富なる語のふ似たる凡人の生涯
 の福とては身枯得夫の交と脱とを無事なるにこそよむ
 のありてはた今が福とてを捨て捨て我知るもる言
 とはるは是甚しき事ありや 大黒と大田と命とナリハカヨハ
カヨハ 天路と道とあるは所と見ハ拒ハのひハ理の拒ハつて
してたありては 又布仕を和布のあり徳をつて 又富と
を知ハハ 福とて 又富と
 えびとての神位を尊とての福とてを尊とての福とて
 毎日氣を信ふるは富なるを尊とての福とてを尊とて
 度火と出見尊憂甚深行海畔ふゆのひつけ塩土老る
 不道の老翁問曰何故ウケハナシと悲ウケハ對のふ書の奉
 末と以も老翁曰勿復憂 苦當爲世計之乃作無月世龍
 度火と出見尊憂甚深行海畔ふゆのひつけ塩土老る
 不道の老翁問曰何故ウケハナシと悲ウケハ對のふ書の奉
 末と以も老翁曰勿復憂 苦當爲世計之乃作無月世龍

とあるは、その体甚古質なり、と書ける百四十量あり

何の体なり、

と云ふべし、その形

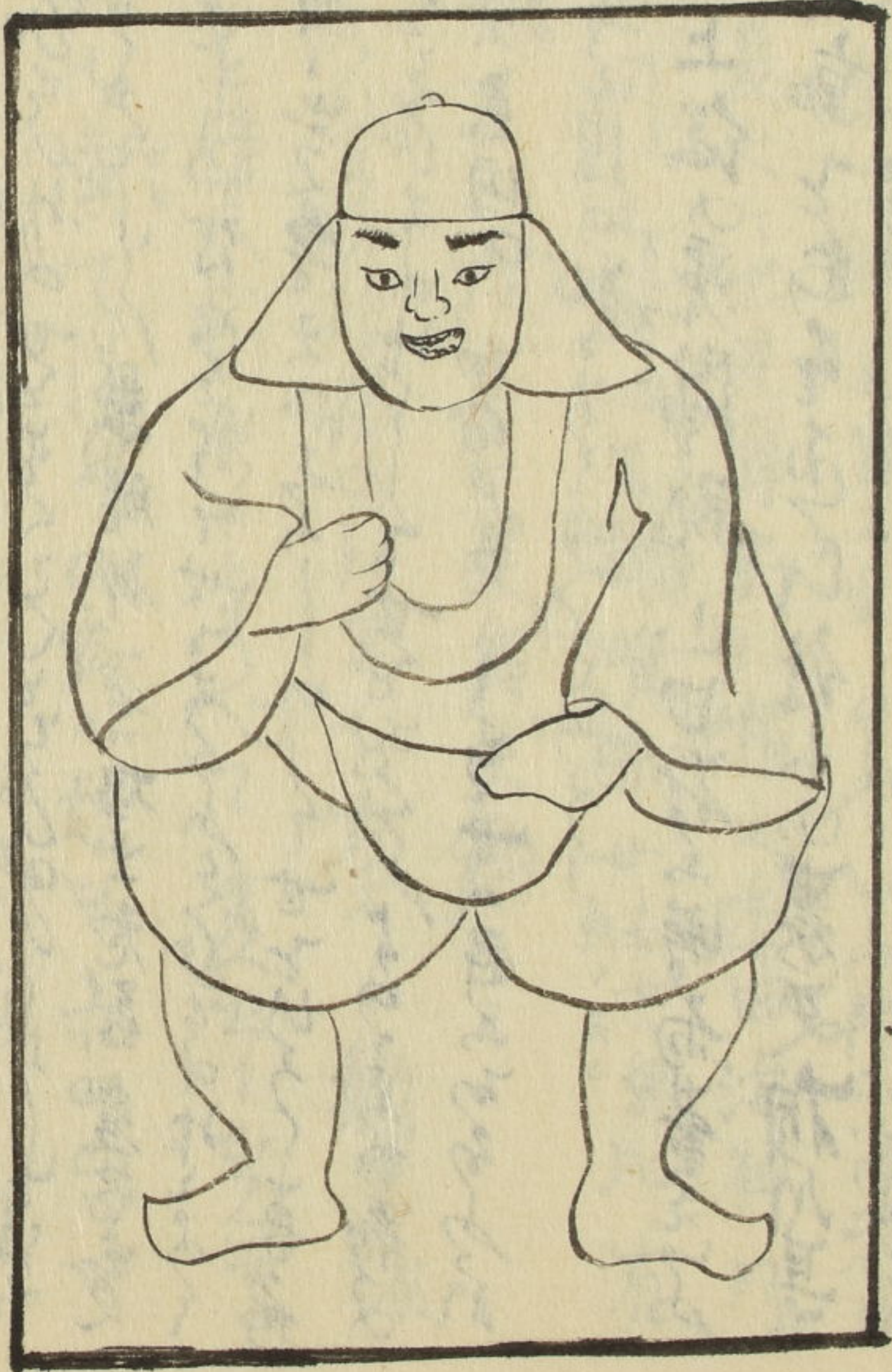
頭ハ帽頭ハカマツリの

の、と云ふは直交

の形と云ふは

の脚と云ふは

せし、と云ふは



の、と云ふは直交の形と云ふは、その脚と云ふは、せし、と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

日の神と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

と云ふは、その形と云ふは、その体と云ふは、その

金毘羅の天竺老僧崩岨山の神王ありて後北の南
月堂之等が金毘羅備靈験記を増し阿含經天竺
文句法苑珠林大寶積經金毘羅天童子經を
りてつゞきこれと考證し鳥相子終
本邦の手取しこれと天竺の金毘羅とを事
たそとんば金毘羅の三輪の外ありしはたあら
よんよんやこれ其の事と務中ありし大黒の太子貴命
とてしゆら愛比領の金毘羅神とてしゆらあり佛記の
外に金毘羅と稱ししやありやうらむかこしとてん
つりしるる金毘羅の傳ありとてんびきの傳とてんび
作あり母貫之の傳とてんびきの傳とてんび子の傳と

洞窟ありしとてんびきの傳とてんびきの傳と
東の彼名かえびとありしとてんび中北ありしとてんび
書され傳ありしとてんびとてんびとてんびとてんび
と相と相通ありしとてんびとてんびとてんびとてんび
無仁記に江美志又愛比諸和言に美領
敏達紀の色人といはれ大色人といふあれと惠美志と
小惠美領とてんびとてんびとてんびとてんびとてんび
あるも海老の彼名えびとてんびとてんびとてんびとてんび
和名抄に繼和名衣
比屋信用海老の字
彼名を因りてしとてんびとてんびとてんびとてんびとてんび
邊部を指すより信を指しとてんびとてんびとてんびとてんび
るものを得不見乃ありてしとてんびとてんびとてんびとてんび

とびつちのりくえみまといし壁言はるはは良人言
もろく爵もろく品その降執かといふを極めし事
とてわが國司の命に教よの次朝廷より信因とて
のり奥の阿倍頼時が頼ひその牙方とてし信因を
らぬらの字良人のまご因とてあつたも相とけは必因と
るまごのあめは是といやあつ信因といふ僕土を北
山房といふ又只房といひまあつた處とせられたる
境をわたりて必房といひてこのあめはわが國の
ひより信の厚も和訓えび古之御常あるといひて
あつちやあつていすといひてあつたもあつたもあ
物あつた子の信もあつて日本夷人も茂郷といふ
事

是とて信ありて非信のついであつたもあつたも
隨筆及村田等の時文摘紙不詳とてあつたもあつたも
とてあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも

○藤丸の鏡

よか屋敷のりくえみまといし壁言はるはは良人言
もろく爵もろく品その降執かといふを極めし事
とてわが國司の命に教よの次朝廷より信因とて
のり奥の阿倍頼時が頼ひその牙方とてし信因を
らぬらの字良人のまご因とてあつたも相とけは必因と
るまごのあめは是といやあつ信因といふ僕土を北
山房といふ又只房といひまあつた處とせられたる
境をわたりて必房といひてこのあめはわが國の
ひより信の厚も和訓えび古之御常あるといひて
あつちやあつていすといひてあつたもあつたもあ
物あつた子の信もあつて日本夷人も茂郷といふ
事

〇箴刺

或人今漆坊の事あり張の事あり... 國語の事あり... 周語上節云... 箴刺と書... 天子の得矢を伸も... 伸或の縮あり... 比てかの衣張乃竹箴と箴刺と... 夫を乃竹と極あり...

箴刺の事あり... 亦是の事あり... 鏡の事あり... 〇和名あり... 漢字あり... 〇類考あり... 右京雜の記

〇類考 月結

千の屋草あり... 月結の直垂あり... 紅領袴の林あり...

あしと其俗人の事と録と入るが味も古有信の
習ふと信するなり又後世の事なりと云ふは
の信りあり又後世の事なりと云ふは
法あり唯の金知改千録なりと云ふは
と信するあり今勿改ふ事年月の久し
り著述あり歷代小史小北征記を載し又
惟男の事あり是等の事ありと云ふは

〇とらけ

千加屋草の事なりと云ふは
葛着藤けり

〇麻娘々

唐よりとらけの神と麻娘と云ふは
耳食録に疫神何神也姑勿深考或曰居域
眉山姐妹三人身著麻衣蓋世仙之流主之同疫
之疫人呼為麻娘云々神靈驗而嚴干小節
病疫之家為信奉之言語猶不檢衣物稍不潔及
誠敬女懈者輒作神言詭譎之雖私隱無
不取揭其甚者疫或不治為得罪於神也靈異
之跡不可勝紀然亦妄禍人者吾郡陳君信書
是時以疫死置於東廂其母撫而哭之坐於床

倦而假寐スルニ見ニ三麻衣婦人入室視兒驚曰向幾誤ホトトアヤニ
此望都ノ寧也コレホリ不レ放還リサテカス言畢出戸去母驚竟見サレハナク
已甦矣モミカレリ後果仕望都縣令罷官歸今猶在申是
觀之レ瘵殍者非盡神之為政也ナスニオチテ其亦數之前定ヨリ
定ル者歟

右耳食保十畧一冊清の乾隆中の人梅川の
巢客譚字九叔遊遊編編玉玉石石云々

○ホムヤトクノ事

白鹿園ハクカノハ知村チムラ太常タウサウ村ムラカノ中ナカにホムヤトクノ事
あり云々是れ今ノ事也
又水後園ミヅノキノ中ナカに言フトウタラトウハ知村チムラノ事也
又ある言フ云魯西園ロシノの事也
羊ヒツレクサ草クサよりリ莖ヒキを抽ヒて実ミを採ツりて
其皮カを毛モウとよんで其カ停トマふ
其味カを割カりて赤酒アカサケと

ひそかにその子孫ありてあし身は是東氏の君に連勝
ありんとしてしと信守信守氣しと昔より親とわら
し曲阿の影も存の明帝の後と海にまじり
あつる自東をたぬるの事とまじりてふふふふ
しに其の信守生人の血を以て死せしもの身は歴々
あつるに終るがごとくあつるのあつる信守を
東をたぬるの事とまじりて血を以て歴々して
是を誠とてし男子を親しむるの血を以て歴々
に身は歴々してあつるは是は歴々果たつてあつ
る四年とて謀殺ししものと昔のやうなつて
又唐書に云ふ孝友列傳あり王女玄が傳ふ云

王女玄は博列の聊城の女なり其父は隋の世に軍
の中を殺されたり玄甫十歳の時に父の志を母の口
に母とて若しと哀泣して死すその戸をたぬる野
中白骨多しありて玄ありてあつる血を以て
骨に流るる涙とて父の身をとつてあつる血を以て
其白骨を以てあつる血を以て血を以て其血を以て
りやして是は父の身とてあつる血を以てあつる
あつる其劍の其事とてあつる血を以てあつる
り時ふ唐の太宗は貞觀年中別つてその血を言上
せしふ中をたぬる軍とてあつる血を以てあつる
あつる血を以てあつる血を以てあつる血を以て

〇あから鴨

陸相が埤雅巻八鷺鳥ノ下に陸相がらひのあから鴨の方言の
齊ノ宋ノ同凡物也といふ事と名づけて鴨といふ事
郭注に曰今の江東に鳥也といふ事と名づけて鴨といふ事
俗に運鳥といふ事と名づけて鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
和名ハ昂カモといふ事と名づけて鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
相通ある事と名づけて鴨といふ事

〇鷓鴣と鴨

同書曰鷓鴣は鴨の一種に曰或ハ之を鷓鴣ハ系と云へば故ハ
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事

又雜と鴨と云へば鴨の一種に曰或ハ之を鷓鴣ハ系と云へば故ハ
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事

皇國と云へば鴨の一種に曰或ハ之を鷓鴣ハ系と云へば故ハ
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事
之を系と云へば鴨ハ鴨といふ事と名づけて鴨といふ事

△一井入の修り二年よりいん

本朝但言に一井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん
汝名集の二井入の修り二年よりいん

△兄弟他人の始

この修り二年よりいん

やれりももろく養生のつとめたり也他人のまきけりしとて誅く
せしもろく羅大位が鶴林玉露の陶渊明贈長沙云後
祖云同源今汎人易世疎慨然寤歎念茲厥初老歎
族譜引云昔所與相視如塗人者其初兄弟也其初
一人之身也悲夫とありしとて誅く

△金井やうの本

これし似たりとありし事物異名なりとて許子知為娼
臨卒書母曰錢樹子倒矣言為娼得錢如將著錢
也

△尻尾よりいん

陸澄の姚平仲の傳り西子入五開姚平仲入青嶽山宅
年末必不死直是不見津後一段醜境耳故諺曰

神意使人見首而不見尾也... 但し... の... 切身を

△きびでひつ

宋王君玉雜纂次編の受便宜... 龜とあり... 龜とあり

△能書子とてつん

こころ歐陽詢の傳れ虞世南の語... 皆得如志... 或謂善書

者不擇筆紙... 張愈志云李可謂能書不擇筆

△鬼のぼんご

唐乃李義山雜纂に不相稱... 經とく... 似今

△んやのてんは

この似あら... 辨... 眞... 山乃井... 眞... 山乃井... 眞...

津屋の常小舟とせしむるゆえに廿歳ありしあひんぐの
世盲人懐くろくしむる者も舟とせしむるに女も亦舟
若くは舟に舟の歌歌をうたふ

△七かゝらぬしんご

この後ハ中ちんごとせしむるものなりぬが宗壇は
師が宗壇大徳はあまふ

「舟のうたをうたふは舟のうたをうたふ」

「舟のうたをうたふは舟のうたをうたふ」

舟のうたをうたふは舟のうたをうたふ



